第七回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

立正大学大学院修士課程　曺　良淑
（韓国）

今日の世界はどんどん変わって行く。永遠な鉄の帳幕であると見なされたベルリンの壁が崩れ、世界中の共産主義者は終末を告げている。しかしまだ中東の事態は、全世界の緊張を高めている。にもかかわらず、人間の欲望の所産である廃棄物資は、地球の危機をもたらすであろう深刻な環境の問題を引きおこしている。

このような時代に生きている我々はいったいなにを考え、なんのために生きていったらよいのか。我々はこれまである時は飢餓の苦しみの中で、ある時は天災地変の苦しみの中で、またある時は戦争の苦痛の中で、我々はその時々をまた将来のために一生懸命に働いて来た。その結果、ある面では物質的には豊かになったが、また別の面ではあくなき欲望がもたらすところの種々の問題を惹起してきた。

本来の正しい思想が理解され実践されているならば、個人のあくなき欲望は抑制され、社会

もまた安定し、ひいては世界に永遠な平和がもたらされるであろう。つまり、この娑婆世界に浄土が実現されるであろう。

私は、社会の秩序と統一は制度の整備だけから成されるのでなく、あくまでも正しい思想と精神の理念を基盤とするものであると思う。

仏教者の修行は悟道を目的とする。そして悟りが仏教の究極的な理想であることはいうまでもない。しかしながら言語と思惟を超越した悟りがそれだけにとどまるならば、他にその悟りをめぐらすことをおこたることになる仏教は人間的な宗教ではなく、非人間的な宗教ないしは超人間的な宗教であるという誤解を招くおそれが生ずる。

単に目的それ自体を追及することよりも、他の人々のために貢献することこそ非人間的ないし超人間的な宗教におちいる不幸を防止する道ではないかと私は思う。

あるとき、私の先生は次のように語ってくれた。「お坊さんたちが、自分の座席を能く守ればそのままで仏教はもちろんこの社会は安心してもよい。」と。

「座席を能く守る」という言葉にいろんな深い意味が含まれている。私が出家の道を選び修行生活を送っていたころ読んだ「初発心自敬文」の文句が思い出される。

汝自無始已采　至千今生　背覚合塵
堕落愚癡　恒造衆悪而入三途之苦輪
不修諸善　而四生之業海。
身随六賊故　或堕悪趣則極辛極苦

心背一乗故　或生人道則　仏前仏後。
今亦幸得人身　正是仏後末世。
嗚呼痛哉　是誰過興。雖然汝能反省
割愛出家　受持応器　着大法服履出塵之逕
路　学無漏之妙法　如龍得水　似虎山其
殊妙之理　不可勝言。

いわんとするところを略説すれば次のごとくなるであろう。仏滅後の末世に生まれているが、出家して、仏の応量器を受持し、法服を着ているそのすぐれた意味（意義）を正しく知って、出塵の経路にしたがって、無漏の妙法を実践すれば、あたかも龍が水を得、虎が山に依ることと同じであると。

いくら一生懸命に修行したとしても、その方法がまちがっていれば、その修行は実を結ばない。逆に、それが正しい修行方法であるならば、いかに苦しくともふみおこなわねばならない。そして、その正しい修行道を見つけるための努力をおこたってはならないことはもちろんのことである。

これは誰の手をかりることもできない。自分自身が自づから行い、そしてきわめなければならないことである。

日本の鎌倉時代に、宗教的危機意識としての末法思想が新たな救済論を形成させた。加えて、鎌倉新仏教は、奈良仏教や平安仏教という既成の仏教教団を覚醒させた。そのことを考えるとき、今日の我々ももう一度真剣な反省をしなければならないことを切に感ずる。

現代の物質文明は、我々をして個人主義・快楽主義・物質主義の考え方を助長し、相手に対する信頼を欠きつつ、また自らは、人間として生きるべき確固たる目標を失いつつある。このような状態にあっては、正しい（真正な）幸福や平和は、いくら努力してもはるか遠いところといわねばならないであろう。

要するに、こんな時代における人間の宗教ということは、まず、人間の現実を包容する人間らしい宗教になることとして、人間が人間存在の窮極的な行方を解明して与えることであり、そして人間が現実を生きて行く永遠な倫理を提示することである。これが生に対する態度ないし姿勢が自分自身を救済する戒律であり、倫理ではないかと思う。

私が出家を決意し、両親から離れる時、父が私に語ったわかれの言葉を思い出す。

「出家の道はそんなにやさしい道ではない。ほんとうの出家者として修行する勇気があるならば行ってもよいが、簡単に決めたことなら止めろ。」と。

自づから進んで決めたこの道を後悔しないようにしっかりけじめをつけるべきだと、そのとき私はもう一度決意しなおしたのであった。

私が選んだこの道が真理に向かうことを、私は確信している。私は釈尊のほんとうの弟子になろうと秘かに念願している。そのためには、まずもっと仏の教えを学習しよく理解し、仏の教えを実践しなければならないと念じている。私が留学する理由は仏の教えをもっと具体的に知るためであり、また私の修行を続けるためである。

自己の修行は自分のためだけではなく、他の人になにかしらを教える契機でもある。自他がお互いに人間らしく生きて行く指標でもあると私は思う。

私は、再び生まれきたときも黙々とこの仏の道を歩き続けることを念願している。